

メキシコの看護教育における社会奉仕実習⑥

長野県看護大学 准教授（国際看護学）宮越幸代

先住民が用いる「民族語」の壁

メキシコには公用語のスペイン語のほかに 60 余りの民族語があるといわれる。同じ国内にありながら、自分たちが生まれ育った首都とは異なる文化・習慣を持つという先住民の暮らしは、社会奉仕実習生らの最も高い関心事であった。

先端医療の進歩が著しい都会に比べ、保健医療サービスの乏しい山村では予防が主体である。その一環として実習生らは派遣されるや否や、広場や小・中学校などでの健康教育を企画した。その際、不可欠だったのが集落によって異なる先住民語の通訳者であった。ところが実習生らは、この通訳者が実習生らのスペイン語を「正しく理解」し、健康教育の内容を住民たちに「正しく伝えているか」どうか疑わしいことに気づいた。ある実習生のグループは、通訳者が自分たちの言葉をよく理解しないまま住民に説明し、次第に住民らが自分たちに向ける視線が厳しくなるという体験をした。これをきっかけに、このグループは誤訳による誤解を避けるために、彼らの文化・習慣に触れる内容を健康教育でとりあげることを控えるようになってしまった。

言葉以外に看護に大切なもの

民族語については、現地に派遣されるや否や、複数の実習生グループが語学講座を企画していた。しかし、結局それは様々な理由で実現せず、実習生は簡単な挨拶や決まり文句を覚えて使うのが精一杯だった。実習の終わりに、ある実習生は語った。

「自分たちは先住民の文化への物珍しさから、言葉を覚えることにすぐに飛びつこうとしていた。でも今は、それが重要なものではなかったことがわかった。大切なのは働きかける対象、つまり『人』なんだということ。」

このように社会奉仕実習は学生の気づきさえあれば、指導者がなくとも主体的な臨地実習の意義を発揮することもある。とはいえ、それはやはり学生たち次第なのであった。

中南米の社会奉仕実習から見えてくるもの

一方、この実習には医療サービスの乏しい地方の医療の改善というもう一つの目的がある。都会育ちの実習生らにとって、この実習は自分たちの国が多民族で成り立つことを実感し、都市と地方の深刻な医療格差という国家的な問題に取り組む好機ではあった。ときに学生に多くの実りをもたらすこの実習の詳細を述べるのは別稿に譲るが、残念ながら、筆者が 1 年間追跡してきたこの社会奉仕実習は、大学と施設の間の協定期間の終わりとともに、現在は終了している。この実習を教育として、そして国家の保健医療問題の解決策として、その意義を十分発揮させるために教育機関と医療機関、制度を管轄する政府が取り組むべき課題は多い。筆者はその課題との取り組みから見えてくるものに期待すべく、この中南米の専門職教育で行われる社会奉仕実習を今後も追究していきたいと考えている。



実習後の看護師資格試験合格の場面